一生の不覚

世田谷区　澤井正治

平成元年３月にそれは起こりました。晴天の霹靂というか、自分がくも膜下出血という死に瀕するような病に倒れるなんて夢にも思っていませんでした（当時、４１歳）。日頃の生活の不摂生を、その当時に悔いても間にあいません。高血圧症という診断名は頂いていましたし、降圧剤は服用していたにも拘わらず、です。もっとも悔いるというような理性が戻るのは事件後３ヶ月ほど経てからです。

勤務している製薬会社が応募した「市販後調査のあり方」という厚生省のパイロット・スタディで、その趣旨説明の席上、当社の番のいくつ前だったか知りませんが、とにかく頭が痛いのと猛烈な眠気で、眠ってしまったように思います。飲もうとしていたコーヒー・カップは辛うじて置いてから首がカクッと落ちたそうです。「どうした。」と起こされた途端に大量に嘔吐し、倒れてしまいました。

著名な医者と厚生省の担当官、病院にも詳しい製薬会社がズラリといましたので、処置も速く、まさに幸運でした。直ちに救急車で三井記念病院に搬送されました。これは事後になってから思い出したのですが、カートで病院内を搬送される際の病院の廊下の天井の蛍光灯がどんどん後ろに流れていく影像だけを妙に憶えています。入院事務で、血液検査をするために採血する際、この時は再び正気に戻っておりましたが、血を抜いている最中に再度倒れました。セカンド・アタックだ、といわれたようなことを朧げながら憶えています。

この後、長い間、生死の境をさまよったのだと思います。脳内出血だからと直ちに開頭する訳ではありません。開頭すると出血部位から大量に再出血する恐れがあるからです。保存的治療といって、再出血の恐れがなくなるまで、眠らされた状態に置かれます。この間、大変な高熱で全身氷漬けにされていたそうです。状態がある程度安定してから手術が行われました。

三途の川があるのか、ないのかさだかではありませんが、私の夢で見た状況は薄暮の中を大勢の人が列をなして歩いていくのです。そして、それは舟の渡し場に行き着きます。皆の服装は三角巾こそつけてませんが、着流しの和服（経帷子）です。行列の順番はだんだんと回ってきて、私の番になりました。

これは何河か、向こう岸は何か、渡りたくない、とか色々船着き場のおじさんに言うのですが、取り合ってくれません。後ろを見なさい、あなたが色々文句を言ってると後ろの人が皆、迷惑します。では、私は後回しになどなど、色々遅らせる口実を言うのですが、次の場面では舟（江戸時代の渡し船を想像して下さい）に乗っています。

おぉ、これはいかん。向こう岸につく前に何とかしなくてはと思い巡らしていると向こう岸が見えて来ました。あろうことか、疾うに亡くなっている母親が居るではないですか。母親はこっちは良いところだよ。早くおいで、と言います。おいで、と言ったって、そちらはあの世じゃないか、と問うとそれには答えず、あなたの好きな年齢で好きな場所で永遠に暮らせるんだよ。と言います。それは魅力的だな、と若干気持ちが揺らいだりしました。しかし、死ぬ訳には行かない。何とか戻るんだと思い続けていました。

そうこうする内に舟は滝にさしかかり、落ちてしまいました。私は溺れて、わぁ苦しいなどと、もがき苦しんでいる内に、こちら側に戻ってきて、付き添いの者が「アッ、眼を覚ました」となって、舞い戻ってきたように思います。たしか、身近に居たのは大阪から駆けつけてくれた姉だったように思います。

古い記憶の方が、深層心理に働きかけるようで、「脳溢血で倒れたのよ。」と姉から言われた瞬間、「ゲッ」となって、すぐに布団の中で手と足を動かしてみました。感覚だけで現実には動いていない、という恐れはありましたが、とにかく動かせている感覚がありましたので一安心しました。言葉は片言だけで、ぺらぺらと喋れる状態ではありません。本当の初期は口ごもるばかりで言葉も明快ではありませんでした。

目覚めて、数日間は一気に時代が逆戻りし、学生時代になっていました。住所は大阪の住所で、住んでいる東京のではありません。自分は学生で２３歳だ、未婚で当然子供は居ない、と言い、自分の子供が見舞いに来てくれたのに、甥や姪と勘違いする始末です。また、看護婦さんには独身だ、と堂々と言っていたそうです。

少し回復して病院内を歩くようになってからが、また大変です。看護婦さんからどこへ行くかわからない要注意人物として監視されていました。自分自身でもふらふらと出かけて自分の病室が分からなくなった覚えが何度もありました。この後、病前の記憶、判断力に戻るには長い長い歳月が要りました。

医者は５年で元に戻るか、仕事に復帰するのは難しい、と言っていましたが、今や９年が経ちました。回復の過程で分かったのは、時間と空間の認識が一番難しいことです。小学生低学年の判断力と思って下さい。

一応、退院して会社の勤務にもどった初期は遅出の早帰りです。初期の一週間くらいは妻に付き添ってもらっていました。毎朝、妻に指示されないと生